

龍草廬『真字古今集をあげつろひし詞』の翻刻

雲岡梓

京都伏見の漢学者、龍草廬（一七一五～一七九二）は書

と詩歌に秀でて名声があり、その塾「幽蘭社」が有名である。また、草廬は一時期賀茂真淵に入門して国学を学んでおり、龍公美の名で和文の執筆にも励んでいた。

本稿では、安永三（一七七四）年成立の草廬の『古今集』に関する著書、『真字古今集をあげつろひし詞』を翻刻する。なお、内容と成立事情の詳細な分析については、拙稿「龍草廬『真字古今集をあげつろひし詞』と菊池春林『古今集真名字解』―『古今集』真名本の研究―⁽¹⁾及び、拙稿「荒木田麗女と国学者―龍草廬・賀茂真淵との関係から―」⁽²⁾を参照されたい。

龍草廬『真字古今集をあげつろひし詞』の翻刻

【書誌】

底本 白百合女子大学図書館蔵本。一卷一冊。（請求

記号 090/A 64/4）。

表紙 灰色無地。二十二・六×十六・〇（cm）。「に」

「百廿九」の西荘文庫分類番号の朱筆書入あり。

題簽 「真字古今集をあげつろひし詞」左肩・書き題

簽

丁数 五丁（前後に遊紙なし。序跋なし）。

行数 一面十行。

【凡例】

一、翻刻に際しては、以下の事項を除き、原文の表記

龍草廬『真字古今集をあげつろひし詞』の翻刻

に従うことを原則とした。

一、旧字・異体字は原則として通行の字体に改めた。

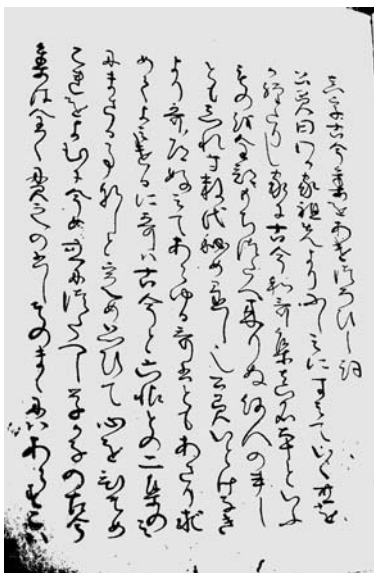
一、本文には読みやすさを考慮し、適宜句読点及び濁点を付した。

一、字間・行間・改行については原本の体裁に従わない。

〈表紙〉



〈第一丁表〉



〔翻刻〕（外題）真字古今集をあげつろひし詞

真字古今集をあげつろひし詞

公美曰、わが家祖先よりふしみにすみていく世をか経たりし家に、古今和歌集真名本といふものを全部もちつたへ来りぬ。何人の書しともしれず、数代秘め置し也。公美いとけなきより歌の道好みて、あらゆる歌書どもあさり求めてよみけるに、歌は古今と六帖との二集のみにまさる事なしと定め思ひて、心をひそめこれをよむに、今の世につたへし草かなの古今集は全く貫之の書しそのまゝにはあらず、こは後人のうつしかへたるもの也、往々とそのしるしありと覚えはべり。よりてかの家につたへしまな古今もて考みれば、よき事かずしらず多く得たり。よりてひそかにおもへらく、かのまな古今は全く他人のせし事にあらず、これなん古今の元本にて真の面目なるもの也。貫之ならではいかにしてかくかきてんや。貫之の記する所うたがひなしと定て一すじにおもひ取て、これを信じ、これをひめ置事としひさし。しかれ

ども此書よの中にまたなき事はあらじ。今一本を得ていよ／＼貫之の書に定めてんものをと、としごろ日比おこたりなう思ひ侍りぬ。こゝに二十五年もさきにひえの山にのぼり、山門の大衣をあつめて文よむ事を、日光の宮より仰事うけ玉はりて、すなはちゆきて、ひえ坂本などに三年ばかりいまして、これをつとめはべりし比、ある人かたりしは、まな書の古今はなには小ばせの契中法師の弟子なりける人、京むろ町下立売のほとりにすめる大黒や、今井自閑といへる人、始は松永貞徳の門人宮川正堅と云人の弟子なりしが、後は契中（マユ）に従ひ、教をうけ、世に名高き歌人也。五十人首の中にも名出たり。その人いづかたよりか、契中死去の後、かのまな古今を所蔵しけるに、身まかりし後は、その子孫は歌好まぬ人々にて、自閑所蔵せる歌書並に、自閑撰述の書どもみな／＼ひとつとして、加茂（マユ）のやしろへ奉納せしが、若はその中にかのまな古今も有けん哉といふにぞ、それより人を頼みて加茂の祠の宝蔵をたづねあさりけれど、しれずとて打過ぬ。いとせんかたなき事になんおもひ侍りぬ。然る

にことし安永三年の夏、京出雲路の祠のほとりにいます菊池春林といへる人、此たびあらたに古今集をまなうつしかへて童子にあたへしとて、こと／＼しく跋文をそへて上木しぬ。公美おもへらく、家にひめ置しまな本現にあるに、尚一本をたづねまほしくてとしごろあさり求めるに、そはいでこずして、おもはずもあらたにものしぬる人のあるよと、ふしぎにも又うれしくもおもひて、やをら一冊よみて見るに、わが家に秘し置るまな書の古今と露たがふ所なく同じきもの也。さて／＼ふしぎなる事なれ。かくもあらたに書ると、むかしのものと同じかるべうも有まじき事なるに、いかなれば同じき哉とふかくあんじみるに、始て其説を得たり。まづ此書家にありしは、まなに書て傍に注文ありて、題号古今集真字解とあり。注あるゆへの名也。此度出板の書も真字解とありて、号さへ同じ。しかれども此度出しは注はなくてまなの素本也。よりておもへば、かの菊池春林いかなる人ぞや。大きなぬす人にこそはべれ。此書はわが久しくたづねぬるかの今井自閑老人が所持せる本也。それを自閑

死後いかにしてか此人の手に入しもの也。もしは自閑が類属にてもや有けん、しらず。何分に此書己が手にありて、外にしる人あるまじとおもひて、己が功とせんとて、今度わがあらたにまなにうつしぬると偽しもの也。されども此人もと無見識なる人ゆへに、此古本のまな書はむかし貫之がせし真の古今集なる事はおもひもよらず、古今集もとよりかな書なるものとのみ心得、此まな書はたれぞ中世の人か、又は近世の人などがふとまなに直せしが、自閑が手にありしぞとのみおもひて、しからば他人の功にせんよりは己が功にせんとて、此度自己にまな直しぬると偽りしことうたがひなし。さなくてはわが家にひめ置けるまな古今と露たがひなくあらん事のべうもなし。されど団子食ふもの、あとかくす事しらぬ類にて、彼外題はやはり初めよりのま、にて、注もなきに字解とつけたるにても、偽りなる事明らかなり。初めの書は解あるによりて字解となづけぬるを、今素本を字解といへるは物と名とたがひて、偽りといはでも偽りなる事はかりしられぬ。且此書をみるに、中／＼今時の

人のしらぬ事ならぬ事往々ありて、上古の人のせし事
明々白々なり。春林あまりあさまなる偽りはかくいはで
もする人はしるべけれども、初学の人、又かたるなかの
書にとほしき方の人は偽りを食ふ人もあらんかと、記し
ぬるものしかなり。

あふみの国ひこねの文つかさふしみの人

たつのきみえ

おもひよりし事をひとわたりみだりに書しものな
れば、かな、どたがひ有べく哉。よむ人あらため
とは、いとまものならん。

註(1)

拙稿「龍草廬『真字古今集をあげつろひし詞』と菊池
春林『古今集真名字解』―『古今集』真名本の研究―」

(『日本文芸学』第四九号、二〇一三年三月)

- (2) 拙稿「荒木田麗女と国学者 ― 龍草廬・賀茂真淵との
関係から―」(『鈴屋学会報』二九号、二〇一二年一二
月)

(付記) 本稿の執筆にあたり、『真字古今集をあげつろひし
詞』の図版掲載及び翻刻を許可して下さった白百合女子大学
図書館に深く御礼申し上げます。

なお、本稿は平成二十四年度科学研究費補助金(特別研究
員奨励費)による成果の一部である。

(くもおか あずさ・関西学院大学大学院
文学研究科博士課程(後期課程))